

学 位 論 文 題 名

メルロ＝ポンティとレヴィナス

—他者への覚醒—

学位論文内容の要旨

序 本論の目的と構成

本論文の目的は、後期 M・メルロ＝ポンティの〈肉〉の存在論と E・レヴィナスの主張する超越的他者との両立可能性を論証し、著者独自の新たな他者論を構築することにある。この目的を達成するためには、著者は三つの課題を設定する。第一に、メルロ＝ポンティは自-他の癒合状態を強調する共同存在論の立場をとる。しかし、彼の後期思想に関しては断片的な草稿群があるのみであり、自-他の共同性がいかにして成立するのかは必ずしも明確ではなかった。したがって、メルロ＝ポンティの断片的な遺稿から肉の存在論を他者論として再構成することが、まず第一に解決されるべき課題である。第二に、レヴィナスはメルロ＝ポンティのいう他者が存在論の内部に解消されることを批判し、他者は〈存在〉の働きを可能にするものとして、〈存在〉の働きそのものを超越するものであると主張する。しかし、この点に関しては J・デリダの犀利な批判がある。このようなレヴィナスの主張は果たして擁護可能であろうか。第三は、両者の独特の存在論を比較するための共通の基盤を設定することである。

第一部 メルロ＝ポンティにおける身体と他者

第一章 知覚・言語・存在

現象学とは、あらゆる意味の根拠(Grund)を確保するために、現象学的還元(反省)という操作によって意味の源泉(Grund)にまで遡り、意味の湧出する現場を捉えようという試みである。しかし、メルロ＝ポンティによれば、還元は必然的に未完結に留まるが、この未完結性は現象学的方法の挫折ではなく、還元不可能なものとしての野性の〈存在〉の豊饒性を露わにする。したがって、超越論的観念論から存在論への転換は不可避である。

第二章 前期・中期における自己と他者—対話の観点から

他方、中期メルロ＝ポンティの対話の現象学では、言語とは他者とのコミュニケーションを成立させるための最大手段であり、そこで「他者に語りかけること」と「語りかけられること」、能動と受動との峻別が無効となる間主観的・共同存在論的な地盤が露わにされる。しかし、メル

ロ＝ポンティは「何かを語ること」の可能性の条件の問いに拘束され、「何か」に対立する「誰か」の契機、対話そのものを可能にする「他者の呼びかけ」を看過していた。

第三章 自己と他者

さらに、メルロ＝ポンティは彼の後期存在論で、幼児のアニミズム的心性やアンドレ・マルシャンの言葉を引きながら、「もはや誰が見、誰が見られているのか、能動と受動がほとんど判然としない」という自-他癒合的な事態を根源的な事実と見なす。「他者を見る」(触れる)-「他者に見られる」(触れられる)というパースペクティブの逆転可能性、すなわち知覚の「可逆性」(réversibilité)の分析を通して、「他者の存在の了解」と「自己の存在の了解」とが同一の「可逆性」の働きによって成立することが示される。

第二部 レヴィナスの他者論

第一章 レヴィナスの存在論—同一性から自同性へ—

他方、レヴィナスの〈存在〉概念の本質は「自同性」(mêmeté, Selbigkeit)と捉えることができる。「自同性」は他項と比較するための外部をもたない。むしろ、自同性は外部と内部の区別以前にある。その自同性の内部で様々な差異が生じ、項の複数性が生じるのである。レヴィナスは存在の自同性における存在論的差異から主体が誕生し、身体が成立するという過程を「イポスターズ」(実体変換、hypostase)と呼んだ。

第二章 自己から他者へ

レヴィナスのいう「主体」はいまだ他者と出会うことのない孤独な主体である。そうした主体が端的に他者と出会うのは、エロス(性愛)と対話の場面である。他者はエロスの関係において所有不可能なものとして私を超越していくが、〈存在〉の彼方へと向かう超越ではない。エロスの関係は「所有する-所有される」という所有可能性のカテゴリーによって規定され、存在論的カテゴリーの内部に回収される。他者との対話に関して、レヴィナスは上述のメルロ＝ポンティの見解を批判して、「他者に語りかけられること」、すなわち「他者の〈顔〉による呼びかけ」が私の語りかけに絶対的に先行し、存在了解にも先行すると主張する。

第三章 存在と他者

こうした主張に対して、デリダは M・ハイデガーに依拠しつつ、他者の〈顔〉の呼びかけは本当に存在了解を超越するのかと反論する。すべては「存在が存在を語り、思惟する」という〈存在〉の再帰的構造において捉えられる以上、〈存在〉の外部は語ることも思惟することもできないからである。しかし、何がそのような〈存在〉の働きの生起を促すのであろうか。レヴィナスはそれを他者の〈顔〉であると答える。レヴィナスによれば、他者の〈顔〉によって呼びかけられることは、けっして存在論的に了解可能な体験ではなく、むしろ存在了解そのものを作動させるものとして、存在了解を超越する。

第三部 メルロ＝ポンティにおける他者の可能性

第一章 メルロ＝ポンティとレヴィナスにおける「思考されざるもの」

以上の考察に基づいて、著者はメルロ＝ポンティの後期存在論とレヴィナスの絶対的他者が両立可能であることを論証しようと試みる。レヴィナスの「〈存在〉のイポスターズ」という概念とメルロ＝ポンティの「〈肉〉の裂開」すなわち能動-受動への知覚の分岐は、ともに野性の〈存在〉から多様な存在者が出現する過程の発生論的存在論的解明を目的とする。しかし、メルロ＝ポンティにおいては、なぜ「存在の裂開」(déhiscence)が生ずるのかは「問われざる問い」であった。他方、レヴィナスによれば、「〈存在〉のイポスターズ」を触発するのはまさに絶対的他者である。ここに、両者の他者論を基に新たな他者論を構築する存在論的基盤がある。

第二章 メルロ＝ポンティの他者論に関するルフォールとレヴィンの論争

「肉の裂開」は原初的には知覚の「可逆性」として発現する。後者は自己と他者をともに「見る－見られるもの」として成立させる共同存在論的機能を果たす。この他者と可逆性との関係に関して、C・ルフォールは他者が出現するのは、そうした可逆性の外部にある言語においてのみであると主張した。これに対して、D・M・レヴィンはまさに知覚世界において他者が出現するのであり、可逆性は他者と共に他者と同時に成立すると反論する。この論争に対して、著者はレヴィンを支持するが、他者はまさに可逆性を成立させる契機であるから、可逆性の枠内を超越すると指摘する。

第三章 可逆性と他者

メルロ＝ポンティのいう「〈肉〉の裂開」は、「野性の〈存在〉」のなかで可逆性が作動し、さまざまな存在者が出現するとともに自-他の分岐が生じる一連の過程である。しかし、なぜ裂開が生じるのか。この「問われざる問い」に対して、著者はレヴィナスにとって他者の〈顔〉の呼びかけが存在のイポスターズを作動させるのと同様に、「他者による呼びかけ」を〈肉〉の裂開を触発するものとして要請する。それは〈肉〉を裂開させ、可逆性を作動させるものであるかぎり、「〈肉〉の存在論」の内部に解消されえない。むしろ、〈存在〉に対する超越である。

結論

したがって、メルロ＝ポンティの〈肉〉の存在論はレヴィナスのいう絶対的他者の契機なしには成り立たない。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 坂 井 昭 宏

副 査 教 授 北 村 清 彦

副 査 助 教 授 浅 見 克 彦

学 位 論 文 題 名

メルロ＝ポンティとレヴィナス

—他者への覚醒—

本論文の目的は、後期 M・メルロ＝ポンティの〈肉〉の存在論と E・レヴィナスの主張する超越的他者との両立可能性を論証し、著者独自の新たな他者論を構築することにある。この目的を達成するためには、著者は三つの課題を設定する。

第一に、メルロ＝ポンティは自-他の癒合状態を強調する共同存在論の立場をとる。しかし、彼の後期思想に関しては断片的な草稿群があるのみであり、自-他の共同性がいかにして成立するのかは必ずしも明確ではなかった。したがって、メルロ＝ポンティの断片的な遺稿から肉の存在論を他者論として再構成しなければならない。

この課題に答えるために、著者は E・フッサールとの対比でメルロー＝ポンティの空間（奥行き）論の意義を解明しようと試みる。フッサールは奥行きを身体の運動可能性によって説明した。知覚はすべて身体を起点とするが、今ここで「ここからあそこへ」という視野をもつ私が、あそこへ移動することによって「あそこからここへ」という視野が可能となるというのである。

しかし、メルロ＝ポンティによれば、この知覚の起点である身体がもつのはつねに「ここからあそこへ」という視野にすぎないから、フッサールのいう「あそこからここへ」の視野は「ここからあそこへ」という視野のたんなる反転にほかならない。したがって、フッサールでは「あそこからここへ」の視野の存立する余地はない。これに対して、メルロ＝ポンティは「ここからあそこへ」（他者を見る私）と「あそこからここへ」（他者に見られる私）の等根源性を主張するのである。この洞察に、著者独自の他者の存在論の基礎がある。

第二に、レヴィナスはメルロ＝ポンティのいう他者が存在論の内部に解消されることを批判し、他者は〈存在〉の働きを可能にするものとして、〈存在〉の働きそのものを超越するものであると主張する。しかし、この点に関しては J・デリダの犀利な批判がある。デリダのレヴィナス批判に応えるために、著者は前期レヴィナスのイポスターズ論を援用し、かつ存在の自同性と同一性を

区別した点にある。デリダが他者はハイデガーのいう存在了解の枠を超えることができないと反論するとき、彼はレヴィナスの存在概念を同一性のレベルでしか理解しなかった。

また、彼は前期メルロ＝ポンティと同様に「何かを語ること」の可能性の条件のみを考慮し、対格（何を）に対する呼格（誰に）の契機、対話そのものを可能にする他者の契機を看過していた。レヴィナスのいう存在と他者とをこのように理解するかぎり、他者は「存在が存在を語り、思惟する」という存在の自同性をも超える、と著者は主張する。

第三は、両者の独特の存在論を比較するための共通の基盤を設定することである。この課題を解決するために、著者はまさに断片の集積でしかなかったメルロ＝ポンティの晩年の草稿から、〈可逆性〉〈肉〉〈裂開〉〈切迫〉などの彼固有の概念によって特徴づけられた〈存在〉概念に著者独自の解釈の方向を示し、そこから他者論を再構成するとともにその限界を指摘した。

メルロ＝ポンティのいう「〈肉〉の裂開」が生じるのは何故か。この「問われざる問い」に対して、著者はレヴィナスにとって他者の〈顔〉の呼びかけが存在のイポスターズを作動させるのと同様に、「他者による呼びかけ」を〈肉〉の裂開を触発するものとして要請する。それは〈肉〉を裂開させ、可逆性を作動させるものであるかぎり、「〈肉〉の存在論」の内部に解消されえない。むしろ、〈存在〉に対する超越であり、メルロ＝ポンティの〈肉〉の存在論はレヴィナスのいう絶対的他者の契機なしには成り立たない。

本論文において、著者は上記の三つの課題を解明しようと試みたのであるが、その三つの試み自体が現代フランス哲学研究に対する三つの積極的な寄与であると考えられる。

現代フランス思想の一つの焦点は、レヴィナスのメルロ＝ポンティ批判（*Totalité et Infini: Essai sur l'extériorité*, 1961）やデリダのレヴィナス批判（*L'écriture et la différence*, 1967）を起点とする他者論に関わる論争にあった。この論争に独自の回答を与えようとする著者の大胆な試みは、十分に博士（文学）の学位を授与するに値すると判断される。